

# 大津 歴博 だより

企画展

2004  
No.55

## 家族旅行のキロク・キオク

7月31日(土)～8月31日(火)



大津市歴史博物館

# 家族旅行の キロク・キオク

最近、昭和三〇年代がちよつとしたブームです。当時の町並みが再現されたフードテーマパークが次々と作られ、その時代を経験した人は懐かしさを、経験していない人にとつても新鮮な感覚として受けとめられているようです。

一方で、戦後の高度経済成長期は、人々の生活・暮らしといった日常レベルにおいて、大きな変化が起こった時代といえます。余暇を楽しむレジ



南郷水産センター（昭和41年オープン）

びわこ大博覧会（昭和四三年）



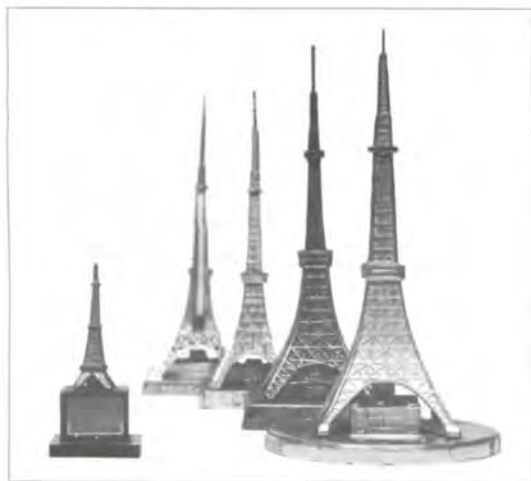
ヤーブームも訪れ、公共交通機関やマイカーを使って、家族は周辺の行楽地に出かけるようになり、旅の思い出を作っていました。

琵琶湖の京阪神方面からの玄関口として、古くから多くの観光客が訪れていた大津でも、この頃には従来の観光地に加えて、様々なレジャー施設やドライブウェイなどが建設されていきました。

本展では、家族旅行を中心とした休日を楽しむレジャーをテーマとして取り上げ、当時の記念品や写真などにより振り返ります。

## — 家族旅行に行こう！

当時の家族旅行の様子を、旅行の「計画・準備」から「出発」、「帰宅」、「思い出」の整理までをイメージして構成し、当時の家庭にあった調度品などと共に展示することで、展示を見ながら旅行気分を味わっていただきます。展示作品は、旅行カバンやガイドブック、旅行先などで買い求められた置物などのお土産品の数々。また、日本のレジャーブームを象徴する出来事だった、大阪の日本万国博覧会のコーナーも設けます。



タワーのおみやげもの（師勝町歴史民俗資料館蔵）



観光ペナント

## 二 ペナント・ジャパン イン れきはく

国内旅行ブームとともに各地に広まり、各観光地には必ずといっていいほど置かれていた観光ペナント。しかし、土産物や旅の多様化から昭和の終わりとともに下火となり、現在ではほとんど見られなくなりました。このコーナーでは、日本全国の観光ペナント約数百点を展示し、その発生や展開を紹介します。

## 三 休日のレジャーは大津へ

琵琶湖の風光と豊かな文化財を背景に、社寺参詣や琵琶湖観光など、大津は戦前から観光地としての性格を持っていました。このコーナーでは、昭和三〇年代以降の交通網の整備やレジャーブーム・マイカーブームの中で、次々と出来ていった市内の観光レジャー施設の様子を紹介します。また、昭和四三年に行なわれた「びわこ大博覧会」も大きく取り上げます。



はり  
ガラス丸（昭和26年就航）



サンケイバレイ カーレータ（昭和40年オープン）

●観覧料 一般…五〇〇円（四〇〇円）

高年生…四〇〇円（三二〇円）

小中生…三〇〇円（二四〇円）

※（ ）は一五名以上の団体、大津市内在住の六五才以上の方、大津市内在住の障害者の方の割引

料金

●期間中の休館日 月曜日

## 第42回ミニ企画展

# 江戸時代の旅

■8月10日(火)〜9月12日(日)

江戸時代、それも後期となると、庶民の間で旅が大流行。人々はお伊勢さん、金毘羅さんなどの社寺参詣に、仕入れや商談などの商いに、目的は違っても、それぞれに旅を楽しみました。そのため、グラフィックをふんだんに取り入れた大版の観光ガイドブックが出版され、ベストセラーとなりました。しかしながら、旅先に持つていくには大きくて不便。そこで、袖に入るような携帯用のガイドブックやマップも登場。版元は、旅の情報を、いかに分かり易く紹介するか、必死になって競争しました。

一方、当時は旅先で、サービスの良い旅籠を見付けるのも難しく、そのため、優良保証の旅籠を紹介する会員制の組合もできました。それでも野宿は覚悟しなければならず、そこで登場したのが、折りたたみ式の便利な蠟燭立。さらに常備薬をコンパクトに収納する薬袋も重宝されました。本展では、旅籠の風景を描いた浮世絵、さまざまなガイドブックや携帯用のマップ、工夫を凝らした旅の形態品などを展示。江戸時代の旅をお楽しみいただけます。



五十三次名所図会 歌川広重画 本館蔵

## 第43回ミニ企画展

# 大津祭の装飾品

■9月14日(火)〜11月14日(日)

毎年一〇月に行われる大津祭は、豪華な見送り幕に飾られた十三基の曳山が巡行する湖国の伝統行事です。大津祭は、曳山の上で演じられる人形からくりやお囃子など、多くの見どころがありますが、曳山を彩る幕類を中心とした装飾品もその一つです。中でも見送幕などの染色品は、ヨーロッパや中国などから入ってきた貴重な品々が数多くあります。

近年、曳山を彩る装飾品は新調が盛んに行なわれ、祭に花を添えています。本展では、月宮殿山見送幕(重要文化財・前半期展示)をはじめとして、各曳山で新調される以前に使用されていた幕類を中心に紹介します。



重要文化財 月宮殿山見送幕 上京町月宮会蔵

# 学芸員のノートから

## 葛川明王院の版木 かつらがわ はんぎ

大津市歴史博物館では、本年秋「一回峰行と聖地葛川」と題する企画展を計画し、現在その準備のための調査を実施しています。その中で葛川明王院（葛川坊村町）の版木を調査する機会を頂きましたので、その中で気づいた点を少し報告します。葛川明王院には、同院で発行されるお札を摺るための版木が三六枚伝えられています。それを並べてみると、いずれも信仰に根ざしたものであることに変わりありませんが、いくつか特徴的な傾向が見えてきます。

葛川明王院は、いうまでもなく不動明王の聖地です。このため不動明王立像を描いた版木が四枚残されていました。最も古いものは、天文二三年（一五五四）に遡るものです。岩座の中央に「葛川」と彫られ、火炎を背負った不動明王が描かれています。明王院安置の不動明王をモデルに描いたと考えられ、背面には「天文廿三稔伍月吉日 藤原秀敏作之」と陰刻されています。表面の不動明王像は、図像面が摩滅し、お顔も判然としない状況で、盛んに摺られていたことが分かります。このため、同じ図像の版木がこの他三枚伝えられており、内二枚は摩滅が激しく、一番新しく彫ら

れた版木のみ尊像の細部が残されていました。

ここで注目されるのは、二枚目か三枚目に作られた版木で、その不動明王版木と近い時期、千手観音と毘沙門天の版木も作られていることです。いずれも台座部分に「葛川」とあり、似た仕様で仕上げられています。背面の鋸目も似通っており、不動明王に加えて二枚の版木が、作成されたものと想像されます。いうまでもなく、この三尊は明王院の本尊と両脇侍で、現在重要文化財に指定されており、一二世紀の作品と考えられています。千手・不動・毘沙門の三尊は、横川中堂形式で、天台宗で多く見られる三尊形式です。不動明王だけでなく、三尊一緒に頒布しようというのが、製作者の意図だったのでしょうか。しかし、人気はやはり不動明王だったようです。



不動明王の版木ののみ摩滅が激しく、残り二体の版木は、さほど摺られなかつたのか、彫りもしつかりした状態で残されていました。明王院に参詣に來られた信者さんは、やはり不動明王のお札を求めそのご利益を願ったといえるでしょう。

この他、天文十年銘の牛王宝印版木をはじめ、中世にまでさかのぼるのではと想像される大般若經転読祈禱札の版木も含まれています。葛川明王院への信仰の一面を、これらの版木は伝えていく予定です。

（和田光生）



不動明王

千手観音

毘沙門天

### 大津宮中樞部建物復元模型

当館では、平成五年、開館三周年記念として、九月二十九日から十一月一日まで『古代の宮都・よみがえる大津京』展を開催しました。大津市錦織地区（錦織一・二丁目、皇子が丘一丁目ほか）のいっかくから、大津宮に関わる大規模な建物跡が発見（昭和四九年一二月）されて二〇年余り、ようやく大津宮中樞部の建物配置が明らかになりつつあった時期に、これまでの発掘調査成果や大津宮廃都の直接の原因となった壬申の乱などを取り上げ、「大津京」の全体像をはじめで紹介した「展覧会でした。

しかしながら、展覧会を開催するにあたって、大津宮に直接関わる資料がほとんどない（発掘調査でも遺物の出土量が極めて少ない）こと、大津宮跡の現地で直接建物遺構を目にすることができないといったように、大津宮の姿をイメージできるものがまったくないという大きな問題があり、そこで考えたのが「大津宮中樞部建物復元模型」の製作でした。

の大きさは縦二一五cm×横一五〇cmとなりました。模型の製作にあたっては、地形の高低差や現在の住宅・田畑はできる限り忠実に復元すること、推定内裏正殿などの主要な建物が立地する区域は現在の住宅は作らず平坦面にして建物を復元することなどが決まり、建物復元作業は、奈良大学教授岡田英男氏（故人）に復元する建物の設計を依頼し、模型製作は滋賀県文化財保護協会専門員林博通氏（現・滋賀県立大学教授）の指導を受けながら進めました。その過程で、土地の高低差が意外に大きいこと、建物の柱の色はどうするかなどといった諸々の問題が発生したが、その都度協議し



大津宮中樞部建物復元模型

ながら問題解決をはかっていきました。例えば、建物の屋根は瓦がまったく出土していないことから檜皮葺か板葺、柱の色は判断できる資料がないことから白木のままで進め、土地の高低差の処理については、当然造成による段差の存在が予想されるが、その時点で見つかっていないことから緩やかな坂にし、そこに建物を配置することになりました。また、新しい発掘調査成果が追加できるように作ってあるのも、この模型の大きな特徴の一つとなっています。このような経過をへて半年後、ようやく模型が完成しました。

なお、当模型は、展覧会終了後、常設展示の「大津京」コーナーに置いて活用することが決定し、今も常設展示室で見ることができます。

当コーナーは第一次資料（実物資料）を中心に紹介していますが、今回は、始めて第二次資料（模型）を取り上げました。

（松浦俊和）